

後漢遺物記

上



後拾遺和歌集序

寶文堂藏

わら宿りのまくらゆてらふれ  
しのの海波ひよもまくらをこのの川國  
えりたまゆれ事れ あくまそ日のうち  
しのづかくとまくあはうりてねにま月の  
秋あすくまくとまのそくしゆく風  
せきくさんあくまくとまのそくしゆく風  
まくひとくまくとまのそくしゆく風  
わもしくまくとまのそくしゆく風  
とわくまくとまのそくしゆく風  
れもまくとまのそくしゆく風  
後年ゆり拾遺集よりまくらを  
やうとまくらをりまくらをりまくらを  
えんわくももむくとまくとまくとまく  
れむくとまくとまくとまくとまくとまく  
ゆくとまくとまくとまくとまくとまく  
あくとまくとまくとまくとまくとまく  
まくとまくとまくとまくとまくとまく  
應法のうりの春林よりにまくらを  
利のうりのうりのつまくとまくらを

りお見いきもよきとけりそのうれ  
あはせとわひよりは思ひ餘らう  
うちものもれりうきよしのまかす  
ありてこそ古今後撰拾遺集」のせ  
ひくもの「次をかねのれり  
のこせりゆきりわは身のまちる  
まことあらわらあらはりあつても  
れえみやにそりわきふくとも玉脛  
あめりきよはくせんとうまわら  
もとくさううりきわまうらうり

さんとくよきはれまひ  
のよしもよもとをもぬのまくのまく  
さまとあへぬあへづりにまち  
とえよしもくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
秋の月れりうまくはまれれの月も  
りととくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく  
ほ拾遺稿集とくとくとくとくとくとく

さうの集は哥子のものとて家  
の集とてもわざり人をもててま  
のあくまでももわざ  
るよのそれからしてうつてのいわの  
ひじりひじりひじりひじりひじり  
ひじりひじりひじりひじりひじり  
ひじりひじりひじりひじりひじり  
ひじりひじりひじりひじりひじり  
ひじりひじりひじりひじりひじり  
又以上聖城等これなりとてよもえ  
あれ行はむにやけみれひづれも  
今うちまことに人のこととてよもえ  
のよれととよじよじよじよじよじよじ

おつまくよきととよまくよりん  
よくととよくととよくととよくとと  
ととととととととととととととと  
ととととととととととととととと  
ととととととととととととととと  
のらまんふかくせんわくととくまん  
人よわよわよわよわよわよわよわよ  
この事よすげよわよわよわよわよ  
くよとひち葉集を巻とてよわよわ  
やした事とくとくとくとくとくとく

昔の事と呼ばれまくる事とまくる  
ものか近きのひにれかとひも集  
乃はれども其をとえりてよくあつてまくる  
ことあつて古今和歌集れりしる  
のありてゆきよりも古今和歌集  
りふすすむと參とえりほほ撰  
集とくらまされたるの法皇へたれども  
は集よしとそりひともく捨遺  
集よしとそりひともく舍遺  
りふすすむと參とえりほほ撰  
集とくらまされたるの法皇へたれども

ほりと頬ゑとくらまわすりしのまん  
とあくとくとこれまくとおあきらわ  
まういきととれりとくまくとくわまく  
じうそのとわくとくまくとくまく  
まういきとわくとくまくとくまく  
まういきとわくとくまくとくまく  
まういきとわくとくまくとくまく  
まういきとわくとくまくとくまく

まつうへとかほりてこその玉の集と  
おきおきおさるのとくよわへん  
あらえきみけあらかじめとえし  
集とくにいとくもくとくもくとく  
おもとくすとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

ちゆら あきとわきとわきとわきと  
れもこの集とわきとわきとわきと  
花の集とわきとわきとわきと  
わきとわきとわきとわきとわきと  
わきとわきとわきとわきとわきと  
わきとわきとわきとわきとわきと  
わきとわきとわきとわきとわきと

の集いのやうな哥へおまえもさへはつ  
られたくあるとどうり石打うちもの  
ましもわらへるもあまとももむらかくま  
うるそひのやうりこれうらよまう  
のほきまくらのまくらひのあらとまし  
まくらしてくらせまくらめく  
やくのまくら事わらうの集もてやうとき  
くらまのうれりわらうもあらうとまうて  
くらわらうとまうたるもの

うらやまのれ家へわれしれあれ  
それへてはまくらす事なれかまと名を  
うらまわせとゆるもあはれえまと  
あひくえうき一もくともそ  
すまも風のよらりひらり  
あまらまくも病とよまえとん  
さくらうてものねうて秋の葉は  
ものけともうひとのあひえ

はくかくさよりあまとあらそ  
のゆきひづねわざれくのゆき  
えもひとひわくとくわくわく

後拾遺和歌集第一

春上

三月一日後仰詠

小大表

いはまでもうあすひすとくとくとくと  
うちれゆきゆきうつまく日見  
りきみ

光明法師母

先方よ今爲もあんまきはまくらと  
まくまくまくらまくらまくらまくらと  
まくら

久ん仰きぬ

源師賢仰

事しきふきの國をもとといそまき歎て可見  
三立日後仰詠

稿後總詠

おのの宮とやまも鐵尾高羽山のまくら

寛和二年花山院寺食よと人仰

大中良能宣仰

まくらのまくらのまくらのまくら

うとうおりに山寺よけむよと人

いと人と人と人と人と人と人と人と人と人

人を事ひて思ひもすく年も立ちも絶え  
山寺ゆゑく八月に雪のまゝと語る

平益國

雪降てゐまゝと雪に雪のまゝと語る

野す

加賀左衛門

郭をまかねば身に立まつて年はうるわしき  
天暦三年左近大臣の平賀一竹  
きうち屏風にあり

太平山院

あらわづのまきよを打ひ安きはまち

一乗院の唐時歎かくまくそひ  
けりされども

紫式口

三春北山寺をまかねば身に立まつて年はうるわしき  
花山院のまきよを打ひ安きはまち

若狭のあもすと渭のまきよを打ひ安きはまち  
野す

美濃守

まことのたまうとのまきよを打ひ安きはまち  
香葉寺

喜あらやとまことの月のをまとつまむる  
夜の日數の七年夢の月後屏風は終  
時空れりゆめまづふとす

布深井

笠代神とまもとまくわまよとひきを御引  
喜の時空とす

小辨

しまてこうたま（ひまとてあまとまく跡）  
入道ある處在大零（さうりき）からまく屏風  
よ候時空のまくたづふとす

喜志捕手お長

紫もあきもみくらも拂（はな）まきぬまくらせう  
あくし屏風（よだん）よだん鑿（うが）のまくら

下とまくら

入道布志多臣

春せりやうす使（つか）ひのまくらとまくら  
風（かぜ）の春（はる）を八年（八年）にけまくら時（とき）三番奇  
めくら今（いま）一（い）まくらにまくら

便人（びんじん）

喜（き）まくらは（は）まくらとまくらをまくらとまくら

宣とて行ひ

大年正月五日

山中も雪もまだも雪が出来ぬままで  
四月二日おはるへ鳥の山とて  
てくらひをれ

源義隆

西宮守ゆきとさんをきの初孫うすと  
遙子内親王ゆきとせんとくわんと  
四月三日うんづらひほまくあらそ  
橋えどりとくまとひかわま

ちうふ肉とくさりとせんとくえん

けくろ

傍人ちくじ

ほりうちも消えて山室にまともゆうきを  
かりやアキラとくらひのむそとくらひす  
のまことくらひ後行ひ

清原元浦

嘗のめぬくらひとすくらひのてくらひ  
後總れきのあり春山室より  
とくらひとくらひとくらひ

高麗花水野正

尋つて居るにあらずと云ひて其の意をもつて  
お前まへて此處のあはる月日  
もちよからぬ

清原元輔

今年も春在れの日わざまをかの日はよしと  
好いから、春原或ア  
りまくまく月日をすましとぞせせば  
肩子日をすありてねうとてま  
ひよもとひきうどんとある

久保人子

春時ふ生る肩の筋のこもりとやうえ経  
肩る日にもうりてゆづり日遅  
法師のゆよとよと肩もふきしき  
ひよくひよとせひきうじま  
ひよくひよとせひきうじま  
ひよくひよとせひきうじま

（ノイ）  
（ノイ）

琴巣成助

また表ひあつておのじて人のまことを聽  
今上を承るあつて上達す  
うのとくとくとあらぬむち

て五月一日も小便けり

右ノ良也

被けたりやかせね原ひまむら山中宿  
三室院御時より達ア殿上人今と  
子月どんとうけちうに秋院の女房  
すまどんとうけんとうくとそまう  
あまれくそひとくで女院よまむら

う

降川左官

とあはる月の生とくすり白ひよりく

野一矢

医者と經経

おうち世の事ひる月よみくまとまきうぶ  
泰暦二年四月裏寺食いとまひき  
左近中わら美

君代ひるまきす月ひるねのまもむきうぶ  
三月七日四月よあひりて雪のう  
けもひじとまひき

経勢大痛

今朝起のゆまと引ひまくまゆ雪や記  
四月七日和月よあひりてけちう  
まくまくえつてくやすと通家わ

居れりとてやどりとてせくにれ  
とくらむ

あそづき摘すりとくもまふ春のうひの邊

野

大中長徳宣わむ

白雲峰のさきのまうのいはせむの春の邊

聖泉式ア

春月時ハ雪のまつりかくもあひ出づゆるあめ

ほ冷泉院時時宣后主寺会す

行りまよ

中原頼成書

橋ノうらを伊豆うち我をすめ若さま

月ぢりとくの内竹のりとく

ちう

芳三位

ねもととくまつ年とくれむきのまつ年  
ちまちあらわくあらのまことくまつと

くわんけまよ

大江匡吉

山もと都のまことくとせばててこしれ

能因法師

金もととくまつ年のまとのまくわらま

野 はと 選ふ内歌主

まつはあはは山里とまつてよのまな  
ちりやめとひすく細ひくとも  
「かわいぢき」

あを萬葉伝

まくと魚の沼（玉網とまくの魚網）  
野 はと 富林ゆ遠

すまくの山海をまひのアカヤシマ  
肩立ちよはの因よひをうつ人  
のりよひアカヤシモ

能固法師

むちんくふをもはまのさかとまくの詩  
野 はと 伊人あくす

能く浦の風浪立けのこじまくとむ

まくとくとく

權傳と舞房

ほくのまくとくとくとくじゆえりや  
長久二年弘巣安也御守今いわ  
まくとくとく

源義長

立とおれどよわうと思ふ、此事もやがて  
風流に多くまことにあらへしゆゑ  
旅人の心をかきこむとぞ

葛原長祐

猪ふくらひとも音を響かすにすら  
影へし 稲荷式ア  
秋も空もそぞろ暮のよれとえと燒と  
ほ冷泉院寺にて香の寺今  
あらとぞやう

葛原花東野郎

花すてわすけうすもと風車はるかに浮遊する  
屏風のそりしれれあつ家すれ  
こころうふとぞう

平昌國

梅もとめぐら風吹月夜もしく君の聲  
りづくのうすよしとぞう

大中臣經宣野郎

梅丸ありすむらうすもあらへしふあらへ  
まつもの心もむかへとぞ事と  
もんじゆす

本大納言公

まことの國にあれども梅より外花多

影す 人にあ言

極りとあるの風の吹きそよぐの極れあら筋  
村の活叶拂われうといとぬあら  
人さりよまきをあらゆるひまくす  
ひづりこむる

清原元輔

梅もうひとくじらひとくまくはるはる  
山里に生んむかづくら梅の花と雪

參西院の梅がうつるむ枝葉りやうらう  
影す あら納言公

久保田

あらの梅がうらうくらくらうくら神を乞ふ  
山東梅もとくらう  
豊成助

あれほにくま山里りつとのをとめくらう  
吉風東芳とくらうくらうくらう

支原頭纏物

毒の氣をもつて墨風のやうな  
梅丸とあてはめゆき

支原法師

梅の枝とねぐらの枝と思ひとひけの枝  
たまごを右三束二束もく右三束を  
左のうつよ家へお梅とさううさう  
わくえのさうらにまのひよぬりと  
くありうくうじうれすよ絶ひ  
不竹毛

辨乳女

おうち育ひきと梅もと白いと思ひま  
野へい 大にあ言

我布景うおううと毒丸あつまうううあうを  
清基法師

風景とさうの梅もと白いあうゆうううう  
通雅三位の八葉は家の隣子少人方  
あつ梅のああうとううとあううう  
宣人ううううううとあううう

支原經漸

尋くらむやもせん梅もぢりとまゐるすれど  
あはれ梅衣とひづと

草紙経章歌

未結の人のまゝや白花に梅のうめをまわれ  
ちよちに住むきりまつて二月もうちよ  
人をさうよひづうづう

上東門院中

黒ひ色れ葉あさう山里よれ約りくれまのまく  
影す 小辨

ほせ牛糞すけふ山と又おとせ風景を

波底と見れ

赤條坐つ

ゆゑにやせらうふやめうちえじねをまくす  
あらへ道伝野

竹浦うねる年う廣令へりくとまととまう

弓肉行

とまうるをかくはれぬれめうとくまう

津守圓基

辨乳母

都もわざひよせりて夜令の光の感うちを  
屏風よ二月山のうつとそよづま  
くとわづとよめく

大中良輔宣和店

夜令をさゆりやう小山のきじらあれ見ゆ  
天佐軍門裏すなぐり柳とより

坂上晴城

わく玉年とゆゑも春秋の葉はいすれまくま  
柳いきのあとよとくよくよと

ちあう

葛原仲徳

波うれみとくとくと春柳のうきえよまくま  
影す クル元真

ねずむれとくひくま柳のまよと春風を吹  
二月もすり自遠法師のりよすり  
やまととくまくわきしんく  
て花かんすよんそわくとよしてほ  
りまよすのとと思ひく尋くち  
けぬ

葛原考義

春柳のうきえよまくま  
くわくすよんそわくとよしてほ  
くく花かんすよはくまくまとく

行くさらざれつゝち

葛原隆綱抄

山橋さんぶり道とされし人のんをあうちき  
方のくわうひれさんよ後醍醐天皇の  
依頼のあよこまむかわりきく小僧を  
もそそぎとせりけりうり

宝石多色化

山やいのちまの様うすきの花屋もす  
おもよはりきくよさうの世とやうる  
とくとくとくとく

豊後成助

小糸さん船もあらんとまきとまくと  
影す 永源法師

橋を渡て故えと思ひり思ひも風のいりと  
叶原釣時

梅うと橋の衣はぬせて柳の枝まくせても  
摘要

ゆきも尋にゆん山橋これもりとよふと通

一乗院古時歴上のくと花屋よはる

女めとくづりけり

源雅通韻

わがもあてといひ宿とくす君よまき  
ぬ

感かね

折そくうちをかく病風散にあきなと  
ほ冷泉院清時うてよのとよもよ  
るよまかりてすくとくわくとくま  
くのまのゆきにすこまちてけ  
まかく

一玉後河

思ふふむりまくれあわづくよとれをま

今上の山時歎せのんくあれはまう  
生きくらま中まのはまくらりと人  
よひくつうとうとう

右ノ辰少方

わくうくとり山獨あわづくよとくてもす  
隣事外にあれあづう山里にあづと  
くふくちとく

源通

今上之臣人代事くわれ慶とくまくわる

野

家主補親

はまとうわそれほんのうの柳シダレ

菅原為云

乃手の柳シダレをまかせりやうやうとあらむわら  
あらこれどもかくとくとくとく

小辨

山様さんじょうくすはいりてくへまを通せねば  
まちよひとくの承院じゆういんくらじ重  
さうはいとくもそれくくわく

上東門院中じゆとうもんいんなか

匂におたる花はなの香かくわにやうひよ

白川院しらかわいんあらわくわくわく

民みんアマモ多

寄よらひよどりの白川しらかわの用もちよくわが今いまと  
南殿橋なんてんばしとくらすとくとく

高無松たかなしまつ

夕ゆふの衣きをそめうけぬまよそそり  
うのよせとくも哥おとこの見みむすり  
まむすりとれよそそくに事ことは

すゑとくとく

大武実政

まよひのくとふれど陽花わても年は経つて  
在とかじきりとまづ

大中臣法皇御歌

陽花を右みに今此春まへりくすりあらゆ  
の京都院あらうくさく小山桜とまくに傍

平昌國

道をまかれてかとて陽花をまかして六印の  
無因陽とまくとまく

能固法師

陽花をまくとまくとまくとまくとまくとまく

陽花とまくとまくとまくとまくとまくとまく  
とまくとまくとまくとまくとまくとまく

久人介

桂庭に今紅葉の桜を匂ひまくとまく  
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく  
とまくとまくとまくとまくとまくとまく

陽花とまくとまくとまくとまくとまく

知りゆふとまくとまくとまくの山桜とまくとまく

影

人をかの高木桜と桜れ、花とまくとまくとまく

多喜の様のものもあらまじとも人をなす

道金法師

衣冠の如く今より入る者多くありま

紫式口

葉とひびき山をうなづけたりとそ

う

草原云煙

翁とくはまだ事もなかまへゆきとそ

う

山

翁中納言登峯

野

草木えり

思つて多めぞうう獨れ美称あらう

嘉慶二年四月同会

義氏うちの様とて下ともの風節とて

屏風に絵人衣冠とぞ

平昌國

翁とあらにあらゆれまし時とて唐文院

屏風を三月在寓をす客來

西とす

下をよてひもるまわいもくも花と

ほ冷泉院在まとち時歎上のとむ

ち在院とそ木林院にまわらむに

良還法師

山桜白雲のさくらも葉のさくらん  
通家和良能むじゆうじゆうのとく  
今竹きりにゆう

源縁法師

山桜白雲のさくらも葉のさくらん  
通家和良能むじゆうじゆうのとく  
今竹きりにゆう

良還法師

守の春日人通院ともひまみも知る  
又しとまくされたりゆく  
しのひ約束を三月もむらにま  
川がまうきとこてゆるかとと  
りふくもまくとこどひと

行持の如く

中納言宣教

楊秀さうりはあれがわのじゆく門もえむ  
ままで詫家としゆくとく

坂上宣成

金をさうりてこ楊秀ひ詫家とくにあら  
うつてよれとからくとひづと傳

源綱法師

美秀くれもあひ楊年ひや花の喉詠ひ  
き陽院の花さうりにあひひとあ

の山の花すまうきれすらあ  
あひたてうつてこのれいもき  
もんづくととせひきれひく  
か年にけくうくすれくとも後  
竹の花すくさんあひひあひと  
あひひ

絆因法師

草と風と比見されしとむすめ  
足とてとてとてとてとてとてとてとて  
てとてとてとてとてとてとてとてとて

身まことにすらうからざる事す  
ちとてのうをひのうと思ふく危  
永れのりふづくも  
すく我とれども様も苦の役よりてしむ  
そぞくとてまく女房花さんとも川  
よほわうきうよのう

併せりわ

夕事と暮れとに廻まくと月の夜と  
うちの女房とくまくとあゆみとく  
しきのとくとくとくとくとくとくとく

大江道房別長

主所ありて移情すもとよだあまときわ  
主の移とくわくとくわくとくわく

有原清春

吉野山八千三界の空にまもとあやめ移ふ  
さくらにまもとあやめ移ふとくわく  
家のれりじくとくわくとくわくとく  
とくわく

有原通景別長

思ふよもよはくとくわくとくわくとく  
おれよもよはくとくわくとくわくとく  
おれよもよはくとくわくとくわくとく

うとしめく

良道法師

まともあらぬ山様うてぬまもん  
基長中納言東守と並び約三十  
布のうちも三千の小僧りもこれ  
まともそぞせひも

翠雲庵

數もい様のと庭主に海の花のうそほ  
宋三藏院の清屏風に移る山様を  
忍ふとしめく

源通

支那くぢやゆんすとまよはきうこ山様  
かずは附屏風の絵よ拂れあわく咲  
ふかふくとれわうとしめく  
我あは咲くらむち拂れぬれまよ山様  
大納言の御衣のうらにんとしめく  
てとくとくとくとくとくとくとくとくとく

中務宣平年號

花をまよ敷きほがみおみゆづきとくとく



後拾遺和歌集第二

春下

三月二月より花と山遊して

花山院御鑒

花山院御鑒  
天臂は時の屏風ありのれわらう  
ももとす

清原え浦

わらそひらましませ桜毛もももらに達也  
せら寺のり花とす

生羽辨

生羽辨のいせきをひよ有てととほ  
承業五年六月於西園歌玉家会  
一叶もくにいたぐるのと  
後行こうす

尾羽左衛門

橘花あらわすに思ふ歌とくやまほ  
影す 四大長

かをかむ歌とくやまほとほう歌  
天祐六年元令

天祐六年元令

平道國

りとせふ物もわきを揚もありぬべからず

大中臣種宣和院

揚をまづひあれをくわらすとのあじしもか  
屏風納よそくはれのらうどりもくは  
くうとうとくとくとく

源道國

山里に散をもかみれゆよ歌とまくとく  
石井主のゆきくわきくとくとくとくとく  
いせんくわくくわくとくとくとくとくとく

わらわくわくわくわくわくわくわく  
わらわくわくわくわくわくわくわくわく  
わらわくわくわくわくわくわくわくわく

左辯通後

生あ絶えぬまくわくもあまくまくまくまく  
山河爲れとくわく

橋成元

橋毛道方さうまくわくもあまくまくまくまく  
溌のまくとくわく

佐上宣成

様しき隣までて風をあそびりうち

衣の底ふらうへむうすとよ

清原文補

元の底ふらうへむとよ  
衣の底ふらうへむとよ  
義勝三年内裏に奉公のう合ひました  
とよんむす

清原通宗文

おじいは故もまこと獨もありたとひとす  
ひ

永源は仰

今ゆとくとゆとくめうせひ故とほ

三月よりに在だらくとくとくとくとく

吉門清圓殿

山ひきれひ故まゆとくとくとくとくとく  
永承八年六月五日秋月秋の事  
奇今竹子作

大武三位

臂を思つてまゆれとくとくとくとくとく

ひす 中納言定村

年とてねよとくとくとくとくとくとくとく  
家の様ひらうてあよさうとくとく

太白あがま

ゆふあるをとくを傷衣をひだまをとく  
白月もくの月のじりくにれまと  
えんじりまと

太清門右大臣

絶末もえどもや白月のじりくをめを差  
新月もえどもや白月のじりくをめを差

新原為時

とれども晴て花咲むりと源を思ひまく  
庵よきとれもくねく教て仰まかく

新原義重

風すみとせす、夜傷衣を差すらひとく

三月うちに叶のまどとくひまく

新原義春

此見れや三月の半まどとくひまく  
つ」とく

新原義重

異体わざとをひくせば、紅葉のとくひまく

新原義春

わざとをひくせば、紅葉のとくひまく  
月橋とりすまくはらてえ病患をまく

うりよ庶民の事とりへわまひて  
くゑんくへりきり

大中長統宣教院

西行氣うりとされ候るにゆきもあらばを立  
毛

秋之女御  
紫に角は深くすもいすもひすゆも

源為義おれ

善氣わでりせひ葉我りよりはまやま

大威高き

源に轟きうりしとくそ山の峰うちきりえ

久久二年弘徽女房來寺令よひもと

良道法師

えくれくとく興徳寺よさもよさもさう井の

毛  
あ原とく

都路とさづきのて面もあとさきまくわ

法輪よ道命法師の仰さりとく

小まくりよつよとくちゆくまきを  
きくしり

法円法師

我法圓とゆきとくもすが筆をひき

三月つまりは都のことを

身人行まう

中納言宣教

都の事の多くは書かれてゐるが、その初めに  
三月つまりは月候書くと云ふもの  
行まう

太中臣能宣宣教

すこし多くあるので書かれてゐるが、その多くを元  
三月はばかりの日あやれと云ふやうに

身人行まう

承胤法師

身の出来のことを記すと云ふものである



後拾遺和歌集第三

其

宵はひの日の月あり

和泉守

楊子津夜とて山雪ありをまう

四月郊云と紅いとまう

あら明御和臣

鳴きそよに花がれども紅く郊云乳

はの圓ひとまうとまうとまう

能因法師

我有代耕のあふけり對ひ風也とひともかう

冷泉院のあまとすきり對面育翁

すまうきりに

源宣之

文書はしきくもむらめくりせりゆゑやあくまう

野す 常林公

林とくらむれ秋山のきくわくとくらむ

山里のあら野とくらむ

本中良輔弘

全とくすのいとまほとくらむとくらむ

山里の印札と申せむ

秀吉通家御臣

名を乞ひて山里の印札と申せむ  
民の奉寫を乞ひよからむ時ニあらず  
て可今一印をうのとれと傳  
人へもとと  
白浪の毛を乞ひてつゝ印札呼う語をうち

影

月新と申すを呼う印札あをそと印のうち  
わざす可今一印をうし印札と

影

大中臣經宣と申す

印もの呼うわちに時きぬもは黒地酒のうち  
西子内親王の毛をうし印をうにと  
のまへ一印をうし印をう

印

見渡は波の毛をうし印を呼う秀の里

伴勝大捕

印を呼う波の毛をうし印を呼う秀の里  
印を呼う波の毛をうし印を呼う秀の里

源道誠

雪とのみあやまれて和花風多きよりと申す  
ほくのとよ寺と云ふと可今  
りもよしも

元も又法師

我古代波のまきを雪にしらまの黒毛もあがれ  
影す まえ毛は法師  
郭云我生まそもくすら四のまくす身毛  
宵月はひとりの日右近のも備よけ  
えもじつともすら行をりよ處うすも

よき行くまもれ

延月右近

子観ゆるもむれをのぞてせまとまくわ右近

道令法師 宵よ行をりじつまもれ

左原尚也

よしに氣をぬかさとまの山守ひいよまくら

久

道令法師

長風の山守ひのまくはとまの山守ひいよまくら

禪子山觀もかものじまくとまもれ

女房」そりもとまくは二重院

侍秋院は行をうのりよしと  
あがひそまつたのうこの日をも  
よつてうき

皇后三事化

アモヤミニホトロの財をもす者あり声と  
名のつひてんからよけをもじくと  
ありてとひよどりとまきひけもとと  
義をも房へくゆくうされづく

きく

備花典行

郊ふみのうちをともとくあれあくつとも御に

宮月くらりあらまのゆくらうらむ  
写とせんうつと人のひととせ  
れられ

大年後社主をわら

やまとく君うえを能くよす我山ちもし  
いすとす年行をうらわ年  
ノノ郊ふとくしてくら

清泰法師

うじゆのまをめくらう外のゆうを  
きくす 槩資成

育ひまほとわきまほ鶴わきとさかとあも

承業五年二月六日秋月郡の家

金よしよし

伊勢大輔

そよそよそよそよそよそよそよそよそよ

鶴岡は師

東ふわきくわてすん鶴あとの杜ひすみ

若原通房和臣

文れ音えそりやまと鶴てき声ふよきよ

小辨

種の事えれかづりやま鶴えくねもうき声は  
松子内親王あひすけ合へとくそは  
人くちゆひとくせん行き

序法もとをとく

玉の月ふわまやけうてののむかえ

宇治あらぬとくに本草のはす今

竹ちにけうとく

赤深志

鳴鳥あくいもとくに鶴行ともとくとく  
夜ととくのうと能まてにまもるすされ

相模ちあみのまうらわきよあひを乃

りのりあくせうとすてむう

人に云資物良

東路の邊てふとん郭えあしきのまうらの声

郭えとこくとう

ほ橋建令

竹けや柳ともいに雪もハ林えを新りき  
も保今年正月十五日入道ある故不居  
家可今ま遙聞財もとゆてとゆ

大江翁言

うそとせふまはせきとす声代くまよひ

舟くわくにあらわうりくようりく

道命令は師

郭え行かくこそ思ふまうてのほも神れり  
國もあはきがとづのまゆうてのうりあすが

おととけの山へとゆりて山寺に行

きうよせうとゆ

律師とゆ

一教えがくをもつてちうりまきまよひまよ

かくとゆ

結因法師

堅忍にさうす育れどもあくまでもやうじゆと

大言三位

もあらむと紹興もかく能がたしもとをわづ

小辨

種のよしと紹興はもとよりのあざき  
もとよしとよしとよし

子孫のつゝく

也よやりて六月よもじいともやよもあひを  
承業を年々育歴上の报告よまきと

久松隆實

育歴に育れどもあらむとよしとよしとよし  
字法あるをめ大長あるが儀のほう令  
けきに育れども

ゆゑ

育歴に育れどもあらむとよしとよしとよし  
字法あるをめ大長あるが儀のほう令  
けきに育れども

もとよしとよし

もとよしとよし

育歴にと深の原にあらむとよしのひじて

板後禪和尚

はまくと高麗をかく方氣のものなり

毛寸

殿元法師

舟多のとじうにあらわすものもま

五月八日から九月十四日にまわり

てしんむすり

惠善法師

もともととよきどりさまむへて弱能

永義六年八月八日歿上根合より

良選法師

はまく高麗のさととえうひとうもあが報を  
右辰守わゆけもく付命令行  
きめいゆく

牛牛辰捕弘

鷹をよねてさすわらぬめと見と聞一報  
うじとん行まうとくわらぬれてちう  
くくわらぬものうの三月八日よ

より 伊勢太捕

まくとあるとくのあらわゆるふきとほりを

育多の事よりくを下れても風情らし

人或もを

有とえ花柳のうちせんりあつまとも

かづくとくにわむ

源重之

トモとよしよのゆうを時空へりとみうけ  
字語あらぬ太白が筆のひら可今  
けきくよ筆とひう

源重良純和臣

終るに今すら里の後とまやか奉事は筆をち

影

祐圓法師

ゆくぐる聲を多めに歌ひととひととあらわす

源重之

暮らす生の声とまやかしきあわきを筆を

うねのひ

文政元年原の柳子けとおふくろを筆を

えしとぞあら

源林美

葉月のさくを拂ひ度あま立風を筆を

うれしの月とすとよしわが

吉門右衛門

色の香の月とすとよしわが

大河清通

何とよしわが

宇治あらはるたにあらはるたに

今けむりとよしわが

喜多川家

文政年元序りとよしわが

中納言宣教

序文成りてはまよとよしわが  
道歎き事もあくとよしわが

いよしわとよしわ

猪因は師

いふとよしわとよしわとよしわ

野子 富林家

えもんとよしわとよしわとよしわ

牛馬園

文政年元序りとよしわとよしわ

喜多川家とよしわとよしわ

源川右美

種とさくまの浦くあらぐよもれを愁ひ  
れの夜を明の月とすう

因木辰

亥亥のさめの月とちうね秋とまもて風を  
後総わ月のかとめ 晚涼や秋と云  
ふと後総わ月 源和総わ月

亥山のさくまとくまはとも秋のちうね  
屏風のさよのまよとくみの  
うれうれとくみのとくみ

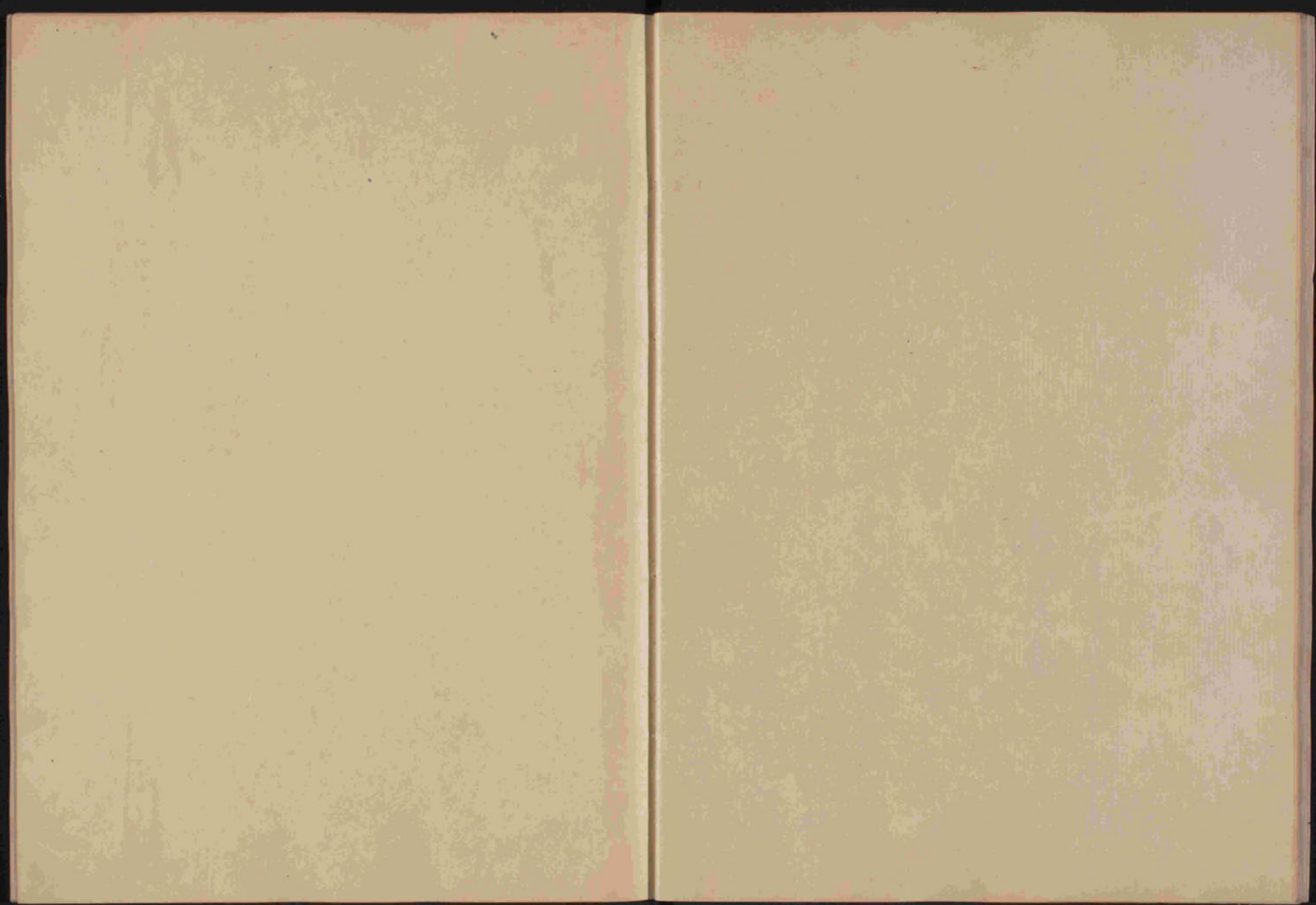
大年辰能宣わ月

亥亥せとあくきまく小糸山秋行行ひまくまく能  
泉のさよおとく浦くまとくみのとく  
うとくみのとく 能脚臂わ月

亥山浦こ昇昇月のさよへしとくの能を渠り  
育むとくとく

佐藤大輔

あたまわくまわくまくまくまくまくのと  
うとくのとく



後拾遺和歌集卷之

秋上

あまくめり月の色

徒然草

打拂せ小枝拂ふえらは多よ秋もさうすきも

恵美法師

清葉落る草木萬葉風吹く坐す秋はすまち

ゆきのこゑと人行ともよ

高原落葉新野

冬の秋うめく身をさき次第の風をうせ

七月七日アシマツ

小辨

夏の秋うめく身をさきとあどじよあく見え

七月七日庚申にあひて山をうけ

大に作絶

ひよああきるをさきとあらゆる天風夜

七月七日アシマツ

小左と

ちよあきるをあらゆる天風夜

七月七日宇治あるをとす大良寺院風

かくにさけりとてあそひ  
あり憶牛女如言悉くともかへらむ

源右衛門

セウハキニの夜トリミソムシモアヤトモモモ  
七月七日からまよひつけ行もす

上總乳母

天河ミツテリキナシのとくとくとくわき初  
毛根うめあめくセウトモア

能固法師

秋水もとくとくやし草食氣もとくのとくを経

七月七日から

板元住

セウキニのねれ続くもく月とくまくまきと

左近通房

ひえうてよそりとセウのあまく旅と思ひて左  
て月七日かくとくのままでとくひけても

いづことくとく行まくにまくにまくにまくに  
まれもゆくあひのまとくまくまくまくまくまく

もくまくまくまく

新左衛門

とあくつかまくわが川すれ里の山のと  
て月で日風かといへるよき風

あらそひのうきすくめり八月と  
あらそひにあらそひとこまうちひむ

のうきすくめり

小辨

あらそひのうきすくめりとこまうちひむ  
脣の物到着ゆくとこまうちひむ

あらそひのうきすくめり

あらそひのうきすくめりとこまうちひむ

害脣月本とくまくもとくのとく  
とくもとくみゆきとくとく

左近中わふ美

あらそひのうきすくめりとくまくとくのとく  
花山院あらそひのうきすくめりとくまくとく  
ゆくとく脣とくまくわらそひのうきすくめり  
とくまくとくまく

大貳えと

秋葉の月とくまくとくまくとくまくとく  
三葉あらそひのうきすくめりとくまくとくまく

うりへ奇にえす者ナム人と  
えひくうんじきよまうとの  
秋月とよづとよめづ

車馬廻

せうれくせとまてせじと先と済う秋の  
大御門左近家内可今一舟  
よ秋月とよめづ

源為長和官

右京府の先あきれましのね戸を秋ニモ  
河原院とよめづ

惠美又法師

とく京元音久人をまきあはして新どく秋腰  
毛

承源法師

方とく免人を御秋の月山あきの人に随  
くとくらの秋南歎月と  
りおひてよめづあり

源道興

金糞直中止とまつて秋の月山あきの  
寛和元年九月四日惠可今一  
とよめづ

友原之風

前月今月と多と秋雲いひかれと秋  
八月もより月もくわづれりとより  
布大綱云云往

もよどもいふもよし草に草むらすひりま  
ひちまくは月とくらゆる

友原花家物語

山すよ行きうじくとまうとまく  
くうけうじくとまく

まきは師

まきを書れぬゆ山里に活をとし秋雨脇  
影す

友原圓翁

鳥の聲の聲とまくとまく八月の先まぢ  
八月十八日

惟宗妙

萬葉うせうて秋葉がくま葉の葉

湯川左衛門

萬葉うせうて秋葉がくま葉の葉

友原隆威

まことに身のうへんがまくらまくらの腰

未深あつ

と表をせよと今朝わづく月と弓  
題す 後ノトす

株もわざと表もとく月と月とまくらの腰  
或人云旗陽院もく八月十五夜月圓

うづけまことに弓法もとく表もとく

と弓法もとく光源法師もとく弓法もと

うづ

清魚元捕

多<sup>タカ</sup>雀のひもとく表もとく表もとく表

と弓のひもとく表もとく表もとく表

大刀三寶物

と弓のひもとく表もとく表もとく表の声

もとく表もとく表

年<sup>タチ</sup>の秋もとく表もとく表もとく表

と弓

に箭中ま

あづくもあづく年とて我弓のとく表の声  
と表のとく表のとく表のとく表のとく表

と表のとく表のとく表のとく表のとく表  
と表のとく表のとく表のとく表のとく表

道令法師

方丈御事ノ原と舊ノ事も亦多く其の事の  
影ノす 年高感

御事生れ秋の夕暮れ其の事我とてすゆや也

大江匡衡也辰

御聞にあらずうり経坐てつるありそくさんと

うねの

まやめとくわく氣奉るに秋分月を此

寛和元年分十月内裏寺令の傳

あ意也

かまくこうりまとす乃んをまととまうわづ初の  
ひづくみのひきまくらひもく  
とまくらひもく

赤深坐

あまくわる事とくまくとれまく海りにむく

ほ冷泉院御内裏のもの寺令

トモク 信長大納

さあ源く接はすそひのとすの風也未達

八月うちりに歎上院とすとすとすと

すとすとすとすとすとすとすとすと

よしと

御製

うそり道をまく夜念のびるよもよす  
介まじくとも

ねのくわす

良選法師

毛皮の室のむすび寝あらにあらうの月

源縁法師

ちのあらぬまきあはの室また  
屏風のきにあらひてあらうの月  
とよかひあり

恵慈法師

毛月の弱引時、故の下やまみを  
福林寺よりまもりも山家秋曉  
といふゆゑとてけりちよふ

源林家わら

喜びと涙、東原の生處もありて麻毛を度す  
お墓わら丹にちゆりて竹もろ叶向  
りてす今竹もろ葉も

源

唐風に秋とよかひのむのねむらす

萩威待康とよあらわと

御製

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛  
山里山里山里山里山里山里

今年は秋也も月

那萩のそめかすとまつりて秋ハより書  
出御門左臣家之谷よ後行もる

源房右兵衛

殊疾とぞく人よもや花もと種とさへ  
見

す 安達師

亂うる葉代下葉吹ふ思やりて有をひき

能因法師

船舟載身すとちれりありのまよと書を能  
西高野寺とぞくとぞく

歟光法師

今春そぞ草色をくわゆるをほひの秋の  
見

房原光祐

あくび全まよすとすらひあらぬよあ  
松内家之谷と令子後行もる

大部三位

秋亨は時を経てはまくおもひをうちを今よもぎ  
着衣家作

麻のともを被るる家はあすとあゝあゝ  
に待候

峯山とみゆきのうき書生をせよまよめ  
毛

馬のゆきわがへんじをやゑん

天台寺を源ん

あくまき金とおとよて布の秋萩がもれ  
ものとす。おもむくとぞとぞ

放因師

思すよきれよきれ根柢からてよきの根の  
よきのひづりよきれよきれよきれよきれ

新居

まく肩よ袖よ袂よ袂よあさえよやもあくよ

牛乳云々

余まともあとも思ひ難く仕てゆき  
八月のうちよもやれねよつと  
のりよはくさう

柳原歌

ほんたゆふるまくからむちとくみのよとほ  
もとけきり人の家よ住むもくろ  
森のあらう時くわづとしまわ  
るやかよ行くととをさうりあ  
といづくへき

兔乳母

ゆきよよそよゆすくもゑのる秋よ

家よよととのいわくわく

柏翁

まよふよしわよまよとせうわるる秋よき  
是す 源時綱

まよふよしわよまよとせうわるる秋よき  
秋よくわよまよとせうわるる秋よき  
まよびの森とくわくもく

梅原乳母歌

度原通家歌

まとう秋原寄に尋き新柳やあら葉  
とそしのらしれ秋月とす  
西と東と

喜之は師

いはれの森朝あけがれを神のこころを  
もひす もるを  
さよひとわらはまよれてもうるる  
寛わえ八月て月の裏す今す  
と見ゆ

橋亭古和臣

毛可 良選は師

いはて玉ももなんたらかのくちよはる  
神木と落葉と秋のすくとゆくもり  
古門と良家と今す

源親花

物のともとれをうちき、とまと流りあ  
秋あ載のくとありあくとくとく  
てよのうれすれとくとくとくとく

毛可

古門と良家と

萬葉とよとゆと秋のあとすれとくとく

人のまほのうらにぬ島衣絣

と見る所も

源川右衛門

お色をひとうせんのあく多めのわらを  
うへよのとともあ裁りにのへ  
まうしてうきよつむ

橋村長

女色をもひのよももあじてくとくを被  
毛す 前律師を還

秋風よまよまよまよまよまよまよまよま

天鷦鷯時の中屏風ようちようち

といひのとくとくとくとくとく

清原え彌

物のいとまもあらぬよひうちよひうち  
あらぬよひうちよひうちよひうちよひうち

脚綱

宿のいとまのとやねまとあらぬよひうちよひうち  
よひうちよひうちよひうちよひうちよひうち

あらぬよひうち

和泉式

あそびにあらわの世界をうどりあらわす身死

影す 酒道渢

はるか歎えにひきと風をす  
村へ店附むらうひくうゆ  
やまくとひしててとゆとゆと  
よしゆくとよしゆくとゆと

秋葉舞脚

まつてふ風に秋の葉に秋の風の葉を葉  
浦門左近家より命令約

秋風とよき

とよきとよき

糸のよしとせりの風のよしと風の  
貧良わらとうわらとうわらと

うけ

三葉小布と

あそびとよしとせりの風のよしと風の  
えんとよしのよしとせりのよしと風の  
のよしとよしとせりの秋をよしと  
ちよちよ秋をよしとせり

僧都主教云

秋の風は松の香りの風笛と秋刀魚の香り  
秋の院寺合掌を以てんとすまう  
とまうりけあまきとくとくとくとく  
まうきうわき風とくらう

支原長信

春風もアツ風もアツ秋もアツ風也  
山々の香とまう

大納言經伝

やうの風の香のえよまきの神風也

太白門左衛門家守令

有原紳衡

宣かれた風のすみれを薫へてよひの花不匂  
照れどもあくよとくよとくよとく

源師賢也

さしてよきまつり秋のよいもまくら花房  
天辱古時清屏風は分半と東も木載  
うくつるふとある

清高文庫

おもづりむれうのる秋衣秋色の秋衣

りにすくりても遅秋衣すくり

大中後院をわん

あはまよ秋の匂ひとままであるせの秋のあはま

庭移秋衣とくろりと

用ひあるを

あはまよ秋の匂ひとまでもあるせの秋のあはま

思野衣とくろりとまわとまう

良還法師

あきゆすよ思ひとまでもあるせの秋のあはま

板着清り家よ奇命りけきよ小庵す

秋のもとくもとくくもとくもとくも

源林友朋

我有よよまよ秋と種すい麻はまのよ叶す海

源林友

あ富ふ花とあひて種すい麻はまのよ叶す海

ひす 良還法師

あひて小宿とあひて種すい麻はまのよ叶す海

山すくよあひて種すい麻はまのよ叶す海

よねあひて種すい麻はまのよ叶す海

和泉式部

今朝の月は秋の月に似て秋の月は今朝の月に似て

後拾遺和歌集第五

秋下

水蒸定多門裏  
新令ま揚衣と見  
うすすまの

牛納立資銀

即身立事もうのいが  
我の神もゆつて

伊勢大浦

よまとくじうけんせん  
いづれのくわれに

若原通房船

うてぬよおとせん度多うかきくあはれ

立原立能

よどみのまじて秋下月  
あとのひづれ

遷子内親王

月十日あまうよ曉らうすきすく

きしりにうすくまのまをうるを

秋院中勢

月下もす風のまくわゆめじそち際ま  
山家秋風といふとぞう

大主越前

山室の絵のまゝうこけをあじてくらむ風景

毛子 源道歎

足立をへる事ありきつゝ里の緑てきき六種の緑  
永義元年四月廿日合

狂歌右左衛門

いがきへ西の財事は事もとれねのよし  
序語あくべんからうどりあまく  
とくわきふくわう

吉原紹衡

日と夜と身と心と身と心と身と心と秋の宿主と  
長年寺にひとひきもつづく人のりとり  
このうらとすととつとひひきれ  
よ東門院中わ  
えりあまて拂はれて席をささとおの  
屏風のあくまうぬあまくくわきと  
わくわくわくわく

吉原紹衡

吉原紹衡

主を待つてゐるすらじゆき

左の辯通後

いがまひきよがののまくれ秋分とて  
あひのまよともひきく人のまよも  
ほよたのまよも

惠心又法師

桔梗の西風の氣れとまき枝を高き  
中納言室未だよけりかすきよ  
うの花をうかづつてくち

大都三位

はりひた方さわのままで詠みうきえの  
上東門院菊ありをよを詠まつよひの  
そつまつりとしより

伴鷹大捕

老もれぞくらうさん白菊花うらほのれりれ  
葵原不夜城御后

紫は岸の浦の萬葉もくらうすと詠うひえ  
後冷泉院の御后はあくへんく詠庭  
菊花うへば行き

大都の長房

朝も夜も嘆息氣を重にあつたが、のどもせう

薑もありうるこあらとて見て見よあり

ゆきう人のよきくひづれうううううう

赤津まつ

えふふうううれ室とえよりんをゆもせ  
天磨門附屏風にうとりとおりとあま  
家ととととととととと

清原元輔

うとうううみち薑も病を死も悪也  
屏風のきふ薑のそとひう家とよと

多角屋とよとよと

大中良能宣彌

明公久よかむ薑もうつらひとじまえ  
いがうとへやうう人のよかとくらは  
うちじれとく月くらに業れうう  
ううとくとくとく

ら辯達法師

白薑うううううううううううう

相模云脣うううううううううう

まわうううううううううううううう

さまとくらわんば

友原経勧

桂園のひはまくまのむらすうづの  
おまうすふりてくとくわいきうす  
あまかまくまくまとめりわまひけ  
えれくくまくま

中納言宣和

我のやまくまのまのまのまのまのま  
永樂元内裏可合にあまくまくま

中納言資経

紫山のまのまのまとあまくまのまのま  
宣和二月入道布衣のまのまのまのま  
けもく屏風よ山里のまのまのまのま  
えもくまのまのま

中納言宣和

山里のまのまのまとあまくまのまのま  
屏風よ山里のまのまのまのまのま  
えもくまのまのまのまのまのま

中納言宣和

かまくまくまくまくまくまくまくまくま  
かまくまくまくまくまくまくまくまくま

山里小屋り

清原久輔

家系じゆきちどもすまはるかとくわくの神がくへ  
月前月葉とくづくらふ

御製

繩くの海を序物あらわしも月此新元引  
為まうらとくづくらふとくづく

清原清成

家系じゆきちどもすまはるかとくわくの神がくへ  
二或アのとくづくらふとくづく

とくづくらふ

延河左衛門

あよみの家あれ大井川じゆきちどもすまはるかとくづく  
大井川じゆきちどもすまはるかとくづく

中納言朝

家系じゆきちどもすまはるかとくづく  
水系家系大井川じゆきちどもすまはるかとくづく

續因法師

風吹きよしの山の家系じゆきの川名錦せうり

毛束花形や良

身りも素をほうひて秋の匂はすまつ  
ほ冷泉院御所在多可今

より 伊勢太浦

秋のあら見度に猶未先のそぞりわざれ  
師賢御高極作の山下にて風氣秋  
風ひりゆくとす

源雅志

高と山田のひづれを以絶風はゆせども  
古御門石室前金子株の因とす

源

旅宿よきし宿八月のちゆき年をす  
そりす 源雅志

名と金子のあそりゆきのやねと遙かに見  
八月盡日情愁とす

源

わどりみて雪をほきし秋と情しづす

九月盡日とす

ゆそくとまくえあらそくまへ新は

法眼源賢

おひさまとちと連れウキまよひあきや  
の月あとの月じめと捕うりよつま  
よあれ 大威賢通  
少移さんとくに引れすぢりかうれうき  
九月晦日とけども

源長

春をまよひゆくまよひと秋をまよひ

後拾遺和歌集卷第六

冬

十月の北風にうだりとすとも大病  
よほりてうつむけきによう

前大納言

あやしむ事とれり大井のむすはれもあれ  
十月の北風にうつむけきによう

大僧正深観

もさみとさなまの綿も神奈川めぐらわる  
兼保二年十月今ト五うりてつるる

大井河よみめにせきをねよまとゆう

御製

大井はうなぎとめくと鼠の山がまえとくとく  
うてうなぎとくとく黒のいづうあり  
ひきれきゆう

高原高麗扇羽根

高車も船と毛のうなぎとくとくとくとくと  
山里の財とくとく行き

承胤法師

神舟と舟の精りとれりかうみのれと

爲事の事と云ふ事ある

源於實

本うちあることを事あるを實うる事ある

秀原家御内臣

緊致も財氣もして體のをふくらまうる

十月うちよ山里にすりとあつてもう

能圓法師

秋月裡あすなが山里の嵐の声があのままであ

字法門ありわざとひきひき

擣き通明

綱代あはれまことまをよりひと錦とわづらぬ  
字法門あはれと綱代のいはまづると

中身内

うちのをと綱代あはれとひと達  
うつて綱代あはれとひと川を  
千をとむと行をよし

秀原春吉

秀原もあはれとひと馬声もとひとまよ  
水東てと内裏代金よみちとまよ

あら

所ノ有居

所の見事のあまにあまむるをあゆみ経

ゆゑ

すあそわくはるはるはるてひきおもせ

毛一寸

しもちよ

あくまほとすとすとすとすとすとすとすとす

多ての月とすとす

大貳二位

山陽のまきまきみのじまきりまきの月

毛一寸

隋墓師

多てよしよしよしよしよしよしよしよしよし

ほよにゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

身の身

とよつよつよつよつよつよつよつよつよつよつよつ

よしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

簡簡師

きよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

律師長脚

みよみよみよみよみよみよみよみよみよみよみ

屏風のまゝ十月よりまゝ  
とくへつてとくへつて

大年辰辰也わむ

あれまのまゝとくへつてのんとくへり  
おまめまとくへつて

か捕

あれひづるをあすもむねみのあを  
霜鳥あとじとじとじとじとじとじとじ

もととと

爲物の本のとれよとれよとれよとれ

あきとととと

大江云實あむ

松ねとまくにまき園のよめくくら敷て  
山里のわきとくめく

橋後緑ねむ

えもひまく我有さむとむきうちを  
水車に内裏のすきすむむとくへ

そ見

林ゆも初もほととくはまの辰年続まむ

うみもととくへつて

素主法師

集めあらがましらうらうらうちとあれれ  
朱殿と翁等の家の事くねるの  
あそびとくへん

う

吉原園行

清富とねりあはまくくはるゆきをも  
隆徳の後甲斐守とせよおせすつり

じとうづくまき

紀伊式ア

かとひ白石とおもむきとよ田とむ

山の雪とみゆめあき

簡因法師

家業の手本よとめゆりとのもね、雪あらまう  
毛

源道跡

お前もよとめゆりのとく月あまう

秀尊法師

う道の手本よとめゆりとく月あまう

吉原園房

いとわゆぢよとめゆりとく月あまう

鷺君の雪とよとまう

津守圓基

往つてまわれはあれども傍つともちへそも  
屏風のをよむる所はあつておあらえ  
（一）

赤深赤

まやかすかとすましれきと黒い雪と赤く  
道雅三位の人々の家のをじつと黒の  
雪のあつまひと門があつたとさう

赤深紅

雪原を通じてあたひ黒い我らがよみうちを

源教安の後

山里の雪社とくらむとそと年ぬれなきや  
法師よりてしむしゆよけきくと書の  
わくこのひづれ

伝教法師

黒れぢとくらむとそと年ぬれなきや  
法師よりてしむしゆよけきくと書の  
わくこのひづれ

（一）

天鷹の御時屏風のをよ三月ゆき

まつてとまづ

清原文庫

我有水原へ宿とまつる又年よりあまの水原と  
宿す所あつてお酒をうなぎのりとまつる  
アリ

入道ある處有

あくまでも種尾と魚をもつて重音うそとつて  
雪ありてけしきうあらしもあれど

よそううきふ

おとてかく

後半八年ともとも種尾うきうきとす

角わたりとくま

水原法師

もしろじくまほくの氣風有れあひくとすき

アリ

牧父法師

まよひまじにけやあらきをうきうきとくめいは  
入道ある處のとくせきとくせきとくせき  
夜あとくせきとくせき

僧都長壽

鷺くまくまにむきいあきうらせうらせうらせう

アリ

宵翁の本

吉月也あれどもひづらてまつたるを今より  
か遂夜絶

葛原春吉

しと生れどもわざ原の池にまつて波を立ま  
ほ三多院東家よりきつ所處よ

る

白鳥はすらじききうち、我身は年は雪よりも  
十二月のつゝむらうら備前あさう  
生羽弁うけよまく一け

源氏物語

主の年ともあそゆくまやそまともじくもよ

卷之二

七

七

七

後拾遺和歌集第七

頌

天磨門附屏風可立春

源順

きぬりもじにて絶筆ちとせまよわんを  
入道抄の壁へひきう屏風よあらわ  
くのゆきもあすかはまう

草薙國

れどもなきて精のうむくみとくもさる  
あれば屏風よしきのゆきかまく

ひきうとまう

しきうせと立陽月と廻る御来幸ひら社をま  
東三室院罕候へひきう屏風よあ  
てあくこ女くすまうりあやめへこまひ  
とまうとまう

源順

あくこ女くのれねまくとまうとまうとまう  
あた佛所明月の半壁へひきうの室  
あまめにけのつえいのうへこまひ  
とまうとまう

前津伊印多又還

君といひつ年を下へゆる先のうゑつえを断る  
内裏の御屏風よいのちあましの家よ  
まつりあらわと

平道國

善秋もきて年づ移サトねとつゝ年とて  
屏風のきようかのうめりよまつひや  
あつと

源通隆

一ひのまゐどすくはきよこむたる事とよま

色す  
人ともひ  
きよとゆよとてくきうれいもひよ  
ほ京院うまれをゆくとてあひ  
もしりわいへ女房うよこひせ  
けりきよと

しき行ふ

先にこ光りとて車きりうきはのせもひ

ほ朱雀院うまれを経ててあひ

もうとある

前大納言之代

いとすれ候被せらるりとさへうえ  
毛

す ふくらはし

考へて居もありまじめにあつたまち  
或人云々方をもす中物を忘れりより  
放失一物もまれりといへうらつま  
る放失しきをほひて内裏うち  
毎年ケヘリとづくづくと  
うき行ぎよより

右官房

是を又やかまのちに下すひまくさみよ

むわ敷敷ふきよせて行ぎよせ夜下

とく

清原文輔

板二重床下にあられをひこませてとく  
近房おほくとれくわきよまつる  
ゆきせつづくゆきとづく

赤深志つ

雪のよの見まともをまつて元年家

あがへとよとよん行ぎよ

兵とぬく木の辻にてきの風をまつ

松井一郎正ひよしをうす園白翁  
今まうらまうう事まくらしも  
まくらゆきりこれと内食下りる  
ゆきり付いたまくらゆきりとがく  
「あんれ

右の臣

千葉つ二事の形よきそ社方のえももひま  
スミテらと冷泉院歎きにゆてのう  
「もせつあひづ

衣山院印製

黒事今へきてまむれ花くらめあくとく  
ほ二事院かこの事よやしき時今とあき  
ぐくあくさくよゆりふきとわく  
又すくせむかくとみくとくとく  
もくくくくくくくくくく

伴鳳大輔

あれからも黒事と方代のくじひとくまは  
た

園院鷹ちやく

黒事と方代のくじひとくまは  
じまのあくわくとくまのあくわく

のううたのうたうともひう  
「レドミンセイハモウア」  
はまく

方三位

黒原まき彦はのあひととせりとまうかのせ  
紀伊ち馬先あすかふじとくくく  
あれいとひとうとくとひわをれよう

清原え捕

あととまんゆまのうのうのほはまやう  
人のりとけくわく

但吉浦の主と法へおき浦の役臣と社が  
人のあらこくのこくのこくのこくのこくを  
さううきをもるおこゑをくくく

源もまゆ

いわくにわまくまくまくまくまくまくまくまく  
大半良捕長じぬみこゆきつよ月不戻の  
おからくも捕款貢仰くまくまく

友原保昌

リシカのちのわからむる様子のちと黒社と  
三重院みえの事とやうす時常アノの跡  
の命令より

大江士か言

考ス代官としてひからまき向まかく山田モ  
義暦二年内裏命令より

臣アマ御伝

君ス代官として黒社風やアミモドモはん波  
宇治も吉良吉家より傳のほと会  
一竹もつともう

友原萬盛安

黒社風を成せざるひのひよりうめうと  
承美定年内裏命令より

翁固法師

日ヒシテ吉良のねあらわらをなまく事多矣  
あれ（命令より）

式部大輔資業

君ス代官白玉桂やちとあくまん波あされ  
冷泉院けのくにせじてもう

セモいきづくとゆゆくくもせぬもせぬも

は冷泉院御翻

黒川の國の官家連ともくじておまか  
東三条院より東支わらひゆきにけり  
まよひとくをねぢる

小大君

そよごみやくもあらき行ひるもひて  
開ひあたまうらうとおまよひすり  
そよめ竹を片時波打うとまよひすり

高原花水わら

そよごみ不競とまよひすれとせ  
そよはあれむ丹波守とてけきとと  
片竹の時時のまよひとけいとつ  
そよとまよひとまよひとまよひ

戻還法師

そよとんきのひせとまよひとまよひ  
ほ金泉院山時太嘗年令沙屏風を江  
國裏山松樹を

式部大輔資業

そよとんきのひせとまよひとまよひ

ああ、江屏風は大金山とある

うこゑすた金山と車を走らむわづかくまの

陽明門院

うきよとく

江竹

紫雲のまほろばとおとづれ

後拾遺和歌集第八

別

參道と捕親方ありまじりてやんとす  
時わが花はめかくらきとばれむるやんと  
もよといひつづく一きう

惠慶法師

紅葉がくあれ秋ももみぞもさうわをばせと  
内

參道と捕親

むしのこ都の紅葉も秋の聲うちもハゆくとも  
ゆ年ぐらむりきりのりもよめうりくち

きうい竹くられと並ひに  
ひそづけきよ

源道歎

老ぬるあともゆも歌ひと都のよし人びつぎた  
東へまよふとて東としうつ日ひゆひき

瑞基法師

都牛のきくらとすもあもおもとんと前まへて  
をはく爲恩おりくらうとあくま  
くわくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

源道歎

列のよき氣を養ふに在るがと思ひとせん

ちのりとよ越後よりうきよあ夜

のれり原為左衛門よりよつて  
きる

友原惟敏

霞の宣打、あらわしめくともかくかくへき

ゆ（あらきさく）すらこなむす

フミシテ

友原長信

のまきよ里別の様すへんてかくしきま

三月もじりよらくこのうち原為左衛

えり竹をすくあくまくすく  
うちれえくほりくろましといせ

えり

選子内親王

御美くも小立あら道といりうそう友の元

内  
友原為左

わくじとけたる友源よしの生社里の風

人のとどこ下よゆりきよ

友原通信抄

化のとれもとくの筆の筋に筋引ひとせん

道持ゆゑわく竹をうめの雨を道織  
のぬにかひやくにかくらのくこま

りくくはんとあくとあくとあくと  
女れもくらよまくらわき

東家倫寧初作

君とおれじ様めぐるまがまをもあゆうや  
我とおれじ様めぐるまがまのじくともあゆうや

入道持吸

はくもくらわきうのうくせ  
家あらうきう人のうくせうくせ

堪園法師

山家す月夜をす風ひをす秋風すと秋もす  
源水清野月をすとすとすとすとすとすと  
よけりくらわきうとそくらわ  
すくふくとくとくとくとくとくとくとく

相模

鷹くらとくらふむと元春風うりのを  
あまつまくらとくらわきうとくらわ  
くらわくらわくらわくらわくらわくらわくら

いととととととととととととととととととと

はのくわにり簡因は仰ぐ  
きそり

大にあま

余も今ゆんほのせいかり足のま  
被削光らのよみうりわきよど

フミアキ

中納之宣教

ひきあけとゆきとくはとくの六箇せけ

「からておほ三月のうちひき

のほよきりきよとくわくとくち  
うゑんきくかくわいいく能くひ  
うよきくわくわく

構則長

約ら、言ふすらもゆまと多す封よがくもん  
はくくちうりうよしまたましけ  
くきよあきいへきくとひくても  
またあひくきくとひくても

フミアキ

慶範法師

はうりも我をもひきえむとおもふて  
はうりのわくともらはばは師也  
かくよつまへ

もと下の次

もと中とあくしゆくひきえむとおもふ  
良勝法師

名あら今と思つとも復まらずとおもふ  
能周法師とあらまうとおもふとおもふ  
よりきて

葛原家延法師

春衣教尊とおもつておもとおもと  
簡圓法師とおもつておもとおもと  
マトウさんとおもつておもとおもと  
あまきまのさんとおもとおもと  
かづのさんとおもとおもと

源萬長

源道歎

思ひ出でるがおもひだすとおもひだすと

のくまうらくうりきうよ  
えもんじゆくわんけれ

こまくへ道あへるをあくままでそまく全て  
えふくまうりきうよつうくう

守納と宣教

あくまのく風吹せひらもとまく膳とれ

源光成

あくらうあくらもわの夜よまたうきわのい  
あくくいよまうりけきよんの飯

まのくまうくうくう

源道隆

かくつあくらくにまくまく事ひらき  
大に云骨筋とをまくくくうりけ  
よもくとのちうくよしまれもしけ  
もくくくとくとくとくとく

源高吉翁

まくじ年とまくをかくら道やまくとまく  
あくくまくわくすまくすまくとまく

ひづくくらうきうじくまくとまく

らうともとひくひきれもつ  
る

參言補歌

和良<sup>はらわ</sup>にあらこゆ都<sup>アラシ</sup>ノ下<sup>アシ</sup>の<sup>アシ</sup>を

橋道<sup>アラシ</sup>角<sup>アシ</sup>とわざれてくらひあら

アハされとさやうすよつ

赤深<sup>アカハラ</sup>まつ

約人<sup>アコヒト</sup>とまくもいはむをまれてほのわかれと

わいひうり女<sup>アラシ</sup>くらともくくをひに西<sup>アシ</sup>  
さんじくとひひれ

中原<sup>アラハタ</sup>松成

うちもちの羽<sup>アラシ</sup>の様<sup>アラシ</sup>といそ圓<sup>アラシ</sup>の<sup>アラシ</sup>を見  
かよしき<sup>アラシ</sup>くたり<sup>アラシ</sup>くわくをま  
やふまうされとせり<sup>アラシ</sup>りまくすく  
よづく<sup>アラシ</sup>をあうり<sup>アラシ</sup>くま<sup>アラシ</sup>くらひまくとひ  
けきうとすりにづく<sup>アラシ</sup>き

參言補歌

年事<sup>アラシ</sup>金井<sup>アラシ</sup>もく<sup>アラシ</sup>くちもく<sup>アラシ</sup>の<sup>アラシ</sup>わらしを

翁紫<sup>アラシ</sup>にあらきう娘<sup>アラシ</sup>子

芳原萬<sup>アラシ</sup>佐

ゆき、誰ともえとう思ひたまへとまへありや  
はく、小まちくのうりゆきよく  
おきゆきゆきよく

連教法師

ぬく身もと縁もとあつたがわらを潤せり  
坐まくことなく筋固ほのりそ  
つまくことなく

大口正義

五色花の如く金毛兔くともすとす雲霞を引  
穿ぬほ所入庵さんとてつまくそ  
そうちゆきよく

うみねとて七月七日さよのうりゆきよ  
よづくことなく

あく納言云れ

天河のうめふふとまきとくちむかのあせりよ  
入庵へ行きてましりほんわうりよ  
そうちゆきよく

穿ぬ法師

えむとまきとまきとまきとまきとまき  
成尋法師りそくにわくらゆくら  
かゆのゆきよく

毛ノ子

いそりとあまをねらひくをもとめの

後拾遺和歌集第九

羈旅

り山より山より山をみらよと  
升りるるもととむけりき

湯川大河大臣

相坂の雪と雪とくとせんとえとととと  
十月もすにまくせよとせよとせよとせよ

きよよあくまよ

前大納言行

行道の雪のまくとせよとせよとせよとせよ

中納言行

あらそひまくとせよとせよとせよとせよとせよ  
くまの道とくまの道とくまの道とくまの道  
あれどよあまくとせよとせよとせよとせよとせよ

らく

花山院御製

猿の音うれしものうあまくとせよとせよとせよとせよ

瓊円法師

都を雪上飛渡とすまことにすりて渡る  
船頭すひきもじる月と毛弓

む捕

山をあらかじめの冬も月もまた  
ゆのやくうちにてとくもとと  
こゆ

多原圓行

とおそよぎるゆき月夜は月夜うそゆ  
はの圓

能原圓行

芦花風も月もに日暮れあらわしの月を  
まくまくまくまく

隋基法師

勢のうちかんじてあらとぬよませてもどり  
しきくうちけがよもとをもど  
りのよなこくともとけがよ

うもまよ

山をまよひすかすりてとねよまよ  
肩くらよあまくまくまくまく

恵充法師

鏡山をもすも善氣をもすりて行ひりち  
七月つづてりとよあらじにくてもま  
りすとまに軍山とらかうとくもく  
くまとくもくくむとくもくとくもく

赤塗木

越そそが都をもとめて室家風をもと風

さす 増春法師

まうちひめきうえあそびおれひなれまえ

津の國よくわくへ行ひくよ夜をも

よひとよひも

良還法師

このかと年をいはしてすむすよあはせ  
あらわにみくとれ亭とくもく行ひま  
まくまとよまちにあひかくとれ  
のくまばんやりてくもく行ひま

鶴岡法師

黒風のうちあひま曳のくもくとくもく  
東のくもくとくもくとくもくとくもく

源重之

東ちにゆきとくみとくよとくりのくわまやま  
らむかのよをくわまくわうてくまく  
はまつまちあくまくわうてくまく  
なれののくもそくわんゆく

人尼居神御臣

東はくはくはくはくはくはくはくはくはく

能圓法師

里ノ木をきれとる黒いあらじゆくもあらじゆく

夕からぬあゆりくわうくわうくわうく

きの川の用いのとひゆく

かともあくまほと秋風を吹きくわのま

生緑のくわくわうてくわくわくわくわく

くわくわくわくわくわくわくわくわくわく

くわくわくわくわくわくわくわくわくわく

くわくわくわくわくわくわくわくわくわく

大中臣能圓法師

波花浦とくまくまくまくまくまくまくまくまく

はくこはくはくらむすめとおもふ  
とまくとまく

大氣高を

風雲そりの鶴おきに我も思ひかみを  
書寫れひきにありよくうまれくす  
あくまきあくまきとまくとまく  
の月と山河とて

花山院御製

月新之勝處をもうると花都のまちもやま  
ちうまのあくとまくとまくとまくとまく  
わふぬりく月れわりきよゆす  
のまんすまうじゆき

中納と賀總

あくと新都のまくいが今もあくとまくとまく  
五  
清或ア  
ましゆめ石浦のまくと新都のまくとまくとまく  
もうちにくちきうたそ月のあく  
ひまくとまく

唐賀玉母

月もくとまくとまくとわくとわくとまく

うきの夜ゆづりまつりきりみづ  
ゆのうす月とまつててすもむち  
橋島系羽辰

劫とくは月新と今來はほどよき  
はくよぬら月れあくアキリ  
夜ノムル

葛原圓翁

教生てすみもくふまれが跡跡月を拿  
つるきりありましわくじりけ  
あは

西主ある辰辰

千葉もあまにうみほりが望まき津の鷦  
うにうりけきにあくとよす  
ウカカカカカカカ

帥あ日大臣

蟹すれにうきまくわく浦もひまき  
りもれくあくをくれけきりもくそ  
ゑんけりきれ

中納言隆家

さかとも郊外やくせあくをあきこまむ花下  
ひたかすりナ月の十日よりあり

の事はいふまでもうりやうりきり

或都大捕胥業

ひきうちをうつる年內小衣の物のまゝあく  
はうりとりのりうきうみうらよもやうら  
としととととととととととととととととと

左大辨通後

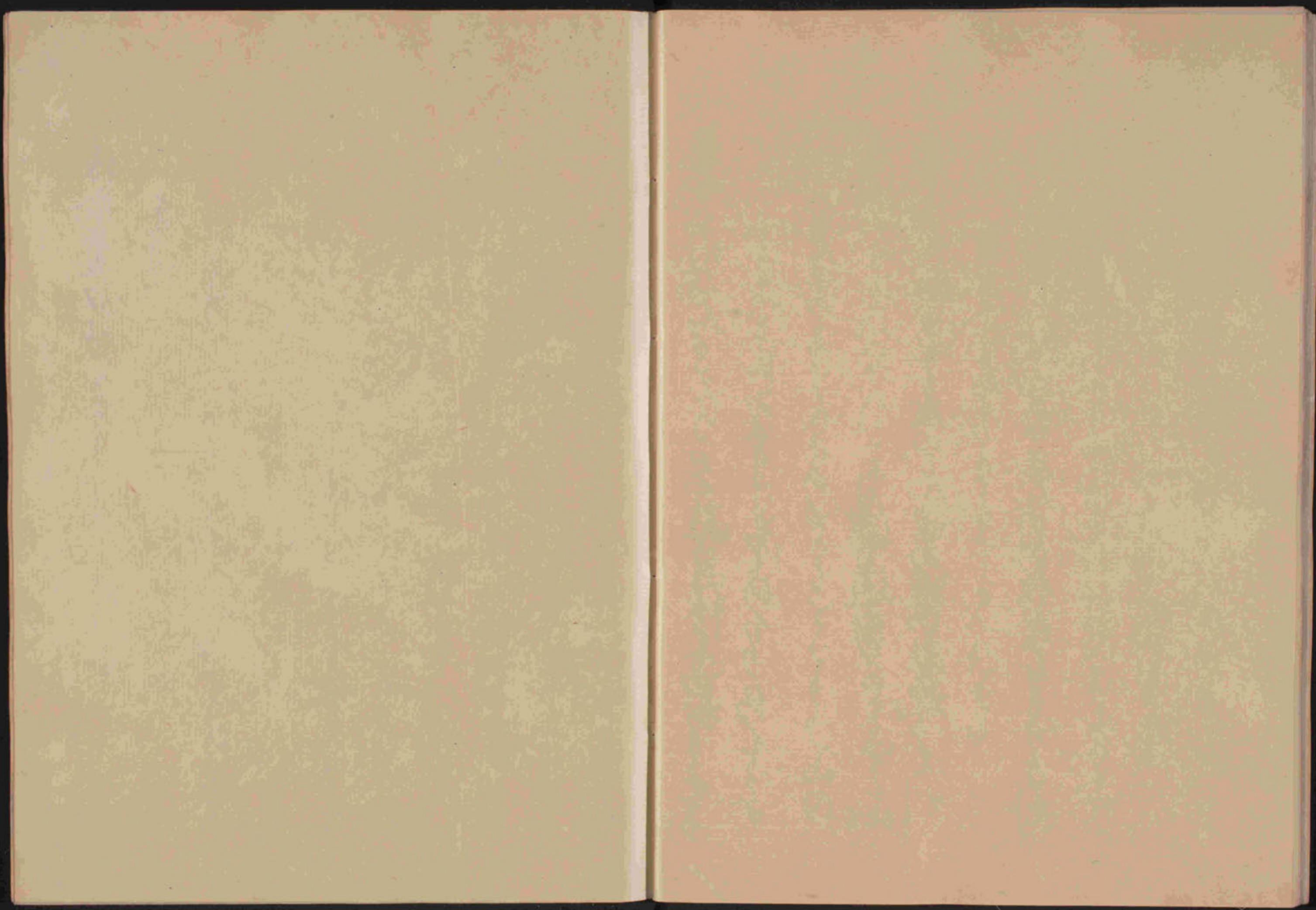
あは吹きとれきりほせきてもやもももももも  
きらきらのうりうきうみうらよもやうらよも  
すまよ月あらうきれ

稿為仲翁

是や、育てぬまひは思ひとまどとゆすとせぢ  
もとのもとのものうりうきうみうらよもやうら  
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

源道國

尼を教えと感心しよも山へ來てそい  
あらうりうらうりうらうり  
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら



後拾遺和歌集第十

春陽

一東院の日向里衣をまくはむ  
れひひてひもよしとひつみれあ  
あかんとかくをまきと間もひめせえを  
らとありてゆるよこもとまくをれ  
そそりきりりよ

猿取葉へととよれがとひす處のアキモ  
そシのまきにけりよとトモシカクモリシニ  
四ツの女竹のまくわりまくわりまくわり

きくからゆまくとひれくまく

源通長

さうを泥たり草をまるとたとの泥と草と  
山里よ二よりわくわくむよととく  
ももみえわくわくよ

ソノシ

立のり柳よととととととととととと  
三東院の白毛衣をまくはむ  
きくゆ月あくわくによう

金ぬ乳女

きよとくやまがア便くそらのまよあア月を  
融院の法事ルスイを終へしもれ  
壯に沙まうそうけまうひもせられ  
スル月せす多野トノと思ひ  
ソムシタ行きも

左近朝光

紫雲のまも黒とも生氣ありとえと  
大納言行成

長保二年十二月より官名を改め

て左近朝光也むの跡へ行ひあれ  
とゆゑ

法事院古融

のまもとひづかくも我を起とるもと起  
入道ちちぬ大臣のまうそうれあへ  
人ヒトまうりうふものうちで行ひれ  
とん行ひも

法事院古融

薪ヒノキを吉良ももまうせつて木林のくらしきれ  
入道一品三のれはくまうそうのまよ

まわるゝ日の日暮の日暮のまわる

まわる 小竹板今ぬ

氣と社おどり氣をくと立つてつまむと氣を  
二月十五日のとくわたりさんれも

のまくとくのうらとまくとくとくとく

弓の箭をとて矢をとて弓をとて箭をとて

弓 矢

弓の箭をとて矢をとて弓をとて箭をとて

三重院の古時宮殿のまくとくとく

弓の箭をとて矢をとて弓をとて箭をとて

弓の箭をとて矢をとて弓をとて箭をとて

山岸

まわるゝとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ああああああああああああああああ

よつよつよつよつよつよつよつよつよつ

よつ

どうぞと思ひてお處をとすかと考へらるる

大和音頭

よし

源  
は一應院に付て中支と月日をせむ

のち朱雀院に付て弘徽殿中支  
八月より是終ましれども行

きり候がくわうりつづけ  
けり

あ中支生雲

いさう君歎く御むすめ事と秋之と  
左季経通威よりむろのひる  
いさうとのあつひとんとんと師  
賀和風よりてゆきもよづき

小方を

まふ少女神と病と相共の事と思ひ其  
靈山よりくろくわんとまくと  
まとうりのまうりてのち十三月があつ  
てひれのまくとまくと

能因法師

まほとまくとまくとまくとまくとまくと  
左季経後事ととれくまくとまくと

東方小方

いづら肺を風の吹く處の秋の中事  
あがめうて山芋かきうるも

りくよつぐ

人ノ下す

山芋の葉の葉をぬにうちあわとほの肺を  
生羽の辯のあやまとくわくわくとまそ  
オとえんじて多うむかわくともち

うきよてはれむ

あた術隆圓

里原御人の歩みをまもるまくは

生羽辯

歩みをひよと風に引くとまもるまくは  
高湯威林りにとれもくとまく

てつまくまく

中主内行

歩みをひよと風に引くとまもるまくは  
清原えぬうかくとまくまく  
よろとくまくとまくまく

にひづくまくとまく

源頃

直すあきの物とあまきをあまたうしきとお  
板則長らこそこれゆふうひき

うきよつう

橋書通

思ひやうかとひ出でふ出でがりうれすを  
ほ冷泉院のゆきゆきあすとやく  
つうよそりけむろりうきゆきとえ  
思ひやうとて上東門院のゆきせゑ  
うきゆきとてまうりけむ

御令旨

思ひ年通事く御也承きて少しうきと  
ほ三室院くもよつをゆきのま  
えぞれひづれくさりく  
育一日もくじてく一無事うち  
あれと先帝の事ケとあまひ生  
きゆくゆくもんより

因防因行

府あわゆる事に監督をめぐらし  
二京前をめぐらし長の事くちうてのち  
あらへるゆくとくとまゆき

中納言宣和

あふくもと卑しと氣がそぞれ筋人間  
よどれりけりうちのまよも  
かくらきよも

葛原主家羽長

うねるのれののうあやめを命るる  
ちのすりきりよからむわくわく

葛原家相如女

あらんと紳人と我あらんとあら

は家よちれとゆくされやて行  
きよめうて又もあつまひ  
種も種よひともうけちよひと  
もよひよひともうけぬりよひ  
おひひよひともうけぬりよひ  
よひひよひともうけぬりよひ

葛原主家羽長

あふくもと卑しと氣がそぞれ筋人間  
一葉挙ひ方ぬりのらわくらきよも

まことに ちらしくおきりゆれ  
かねあ茶葉者

今やもとひがき材ひどい被りし  
小枝内にすくすくしよどみの  
りきりとくらべて

ソロシヨ

さあまえ淮と舞く界にこまよひ  
一茶院をゆひのりきりとくら  
のりきりとほ一茶院あづか門に  
まじてくまゆももくとくとく

まじめにうらうらとあらわし

上茶門院

たゞまじめにうらうらとくら  
みちゆのねにまじゆる茶葉やん  
をとまじくりきりとくらべてく  
の秋みゆき

あらわすの朋友

足音とうとうとくらべてく  
肩ひくわゆひゆとくらべてく

冬雪のあらわすの朋友

大江匡房

かくまほのものすらも雪をまつるをれ  
ゆきよけうかとこゑよけうか  
あやしくさりよされといふこのわら  
山さくまへてふととりひとを  
えみすみけまは

大江匡房

かくまほ今きしん都まちくまくま  
敷道郭をよとれくまくま

大江匡房

今ひきまく事と思ひてあらむらはまよ  
あめくちあまくちくちくと思ひく  
くみけま  
捨てんと思ひてお見ね君よされ 独身とも  
十二月ほくぢの末すみけま  
ケミシのうとすとおもね我はあくまよの  
在る通商の方さりのじうす  
おんじうせうせうじうよりのじうす

大江匡房

かくまほ

御人をもあさよひよすまくと六

はくじゆきよりのうちきくよそ

きよきうと黒ひそめゆ

大威音を

多まわる夜され事はるに火多不社れ  
りあつれれにさりたりのらまち  
せんちよすりてまりくわきまち

まくそつまくとてくわく

源道跡

ゆふたとをあまくはまくとくはるのまよ

が納みきりとあられかくすと  
ちもくらむくらむくらむくらむくらむくら  
いとくよしわせりと株政相手  
はくじゆく

遙る因詠

達者つまうれともよ今へうよば形ひとえ  
わすへあすくまうかとくとく  
くくく行もくよしもくよしのいき  
きくよしとくとくとくのり

まく

伊勢大輔

はまくを直被まくの源をあすり多がめ  
あくからへりもろそり十月一月も  
まゆうりへれのまくらあれ  
めいとしひりとてもりけ  
きともみる

唐臂玉女

考のや花多も立て枝のあをあすり秋す  
東原毛御よとむのりら肩方

義化三姫

墨原代社といひ多アリも多アキのりやまは  
圓融院ほりとせえあらひとく又も  
とくべゆゑのまくらのりらりと  
あらきんうらよりもうひだれとのゑ  
三位れづきのようくましわれうもあも  
ほのとてすりとてまくら  
ひまくセ多ひる

一葉院正嗣

まくを直被まくの源をあすり多がめ  
あくからへりもろそり十月一月も  
まゆうりへれのまくらあれ  
めいとしひりとてもりけ  
きともみる

枝冷泉院へゆきよつを移ひされま  
すゆうりそりそりそりそりそりそりそり  
三茶のつかひあよしとせらうそりそりそり  
とくわわわわわわわわわわわわわわわわ

蘿系承歎あみ仰

すまうもまうもまうもまうもまうもまうもま  
成頃よとれゆうてえのういともち  
わきへりをうり

伊原之浦

御身の月うりゆううううううううううう  
うううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううう

紀時文

年とてきれんとくも御身うちうううううう  
うううううううううううううううううう

清原之浦

御身とくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ほ一茶院五時官をとまうせとまうせと  
そのとまうせとまうせとまうせとまう

うちまかせれまくらますとま

いきまくーりとひよとまか

まくらまくらまくら

にゆ長

我身あくせきとみまをのまくとそと思ふ  
ちのうくわくわくわく日じう

牛株仲

思ひまくらに深き津波あよも引ひまく

牛敷威

うとうと夜色うれむあすけのうれ被れ

あくわくわくわくわくわく

麦原宣補鷦鷯女

麦まくら聲なまくら聲をそへぬようつま  
十月もくらじよりのくらじまくらみぢよ  
て東院ととくとくとくとくとひまくと  
刀ひそれもひそくとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

赤深あつ

浦ううううのうううううううううううう

甚挽樹院よほ東院の山影とかさ

毛利と見ゆるを爲し終ふ  
ナリありいりてより行ひ

生羽縷

いあてうりぬまむをあひてか月先と  
巨衝よどれてのらひゆすより  
けりありみちよあてへと家乃  
りてわまくけりきととされ  
もあてよとれくすとせよくさ  
アマケウキトヒルモウ

赤浦馬

様を喜びて、歎きやうきと高父を経  
くよれままでけりきよ小一乗院  
のひしきのうすあこととくまゆ  
とすてしと興じてよ

源信宗和

いゆてよとてくよとゆれのうね  
は信宗和のりよつりう

伊丹大輔

黒やう多くかく浦をひきはるはくまゆ

あまのめぬらきうとと思ひてゐる

源童之

年をとて育はまくあらじに秋をもまち  
あらむり英一ゆどまち川ゆれ程もまち下  
えうじうづかわまくひゆま  
きくぢりくわともあくまも総  
ももんとひすうとれゆ即よひゆて  
やまもおくさまりてのらまく  
もううてまくまのあくまく  
刀くわくわくわく

まくわくらまの花を散まく白さ里に神やも  
えくくくくくくくくくのら方  
ももにがく法師のまくらけ  
年とてとくとくくふくらん  
えくくよんじゆくぬのくら  
えうとくらしきりといくとくいり  
きれくらとくとくとくとくとくとくとく  
ひとてててて

ももくわくの神ももあぶ御  
みくわくのしらあくら

故にうどれまよす將  
ともみを行ひ

多事とぞ詰まつてひきとまつてひき  
りのいふあはれもよみとぞ  
おまうりとぞおもひとぞの事より  
えゆゑゆせんそとぞの事より

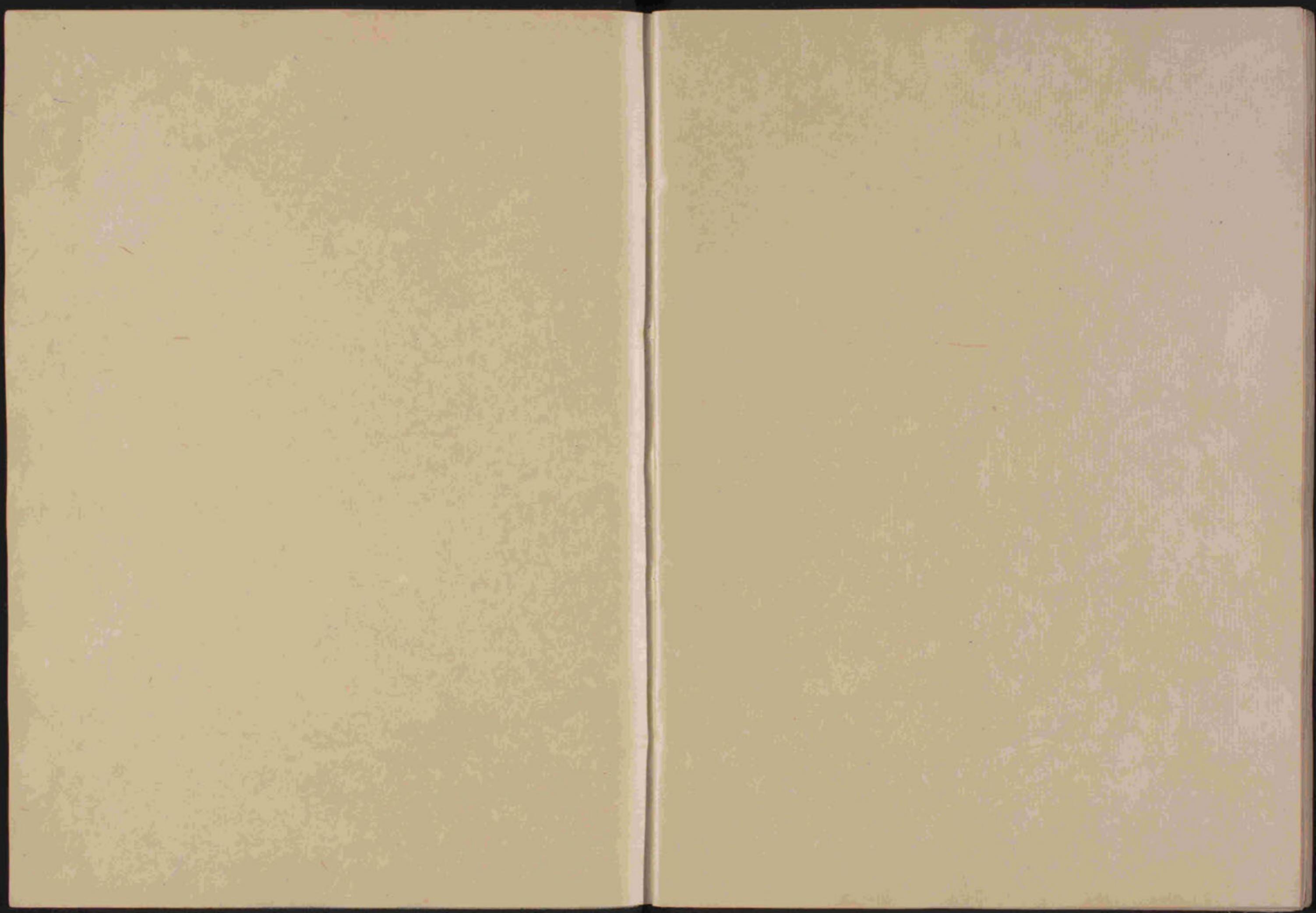
タカノ次

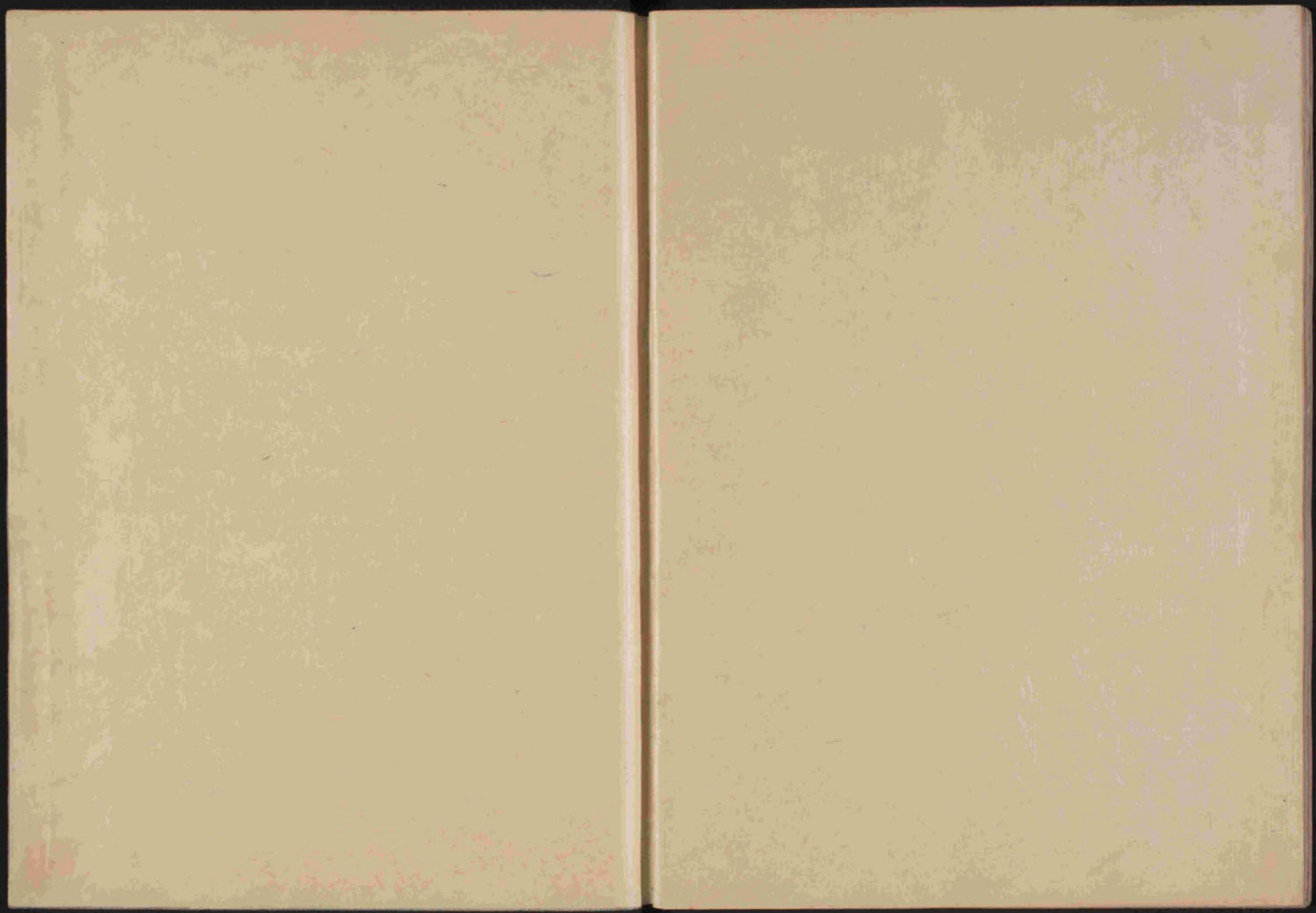
おもひとぞおもひとぞの事より

おもひとぞ

わざ

おもひとぞおもひとぞの事より





132X  
104  
16